

『リチャード三世史』研究ノート

—「史」と「伝」と—

渡 辺 淑 子

サー・トマス・モア (Sir Thomas More, 1477-1535) の *The History of King Richard III* (1514-18) は、従来、「リチャード三世伝」「リチャード三世記」「リチャード三世王史」など、さまざまな言葉が当てはめられ、その呼び名は、研究者の間でも、未だ統一されていないようである。筆者は、これまで一貫して「リチャード三世伝」という訳語を用いてきたが、¹⁾ この作品の全訳を発表するにあたって再考し、あらたに「リチャード三世史」と訳出した。²⁾

モアは、*The History of King Richard III* に先立って、ピコ・デラ・ミランドラの伝記 (*The Life of John Picus, Earl of Mirandula*, 1510) を英語に翻訳しているが、これは「ピコ伝」と言われている。‘life’を「伝」と訳すならば、‘history’は同じ「伝」でよいか、ということが問題になる。また、モアの *The History of King Richard III* は、これまで数多くの呼び名で言われていることでもわかるように、その内容の解釈のしかたによって、歴史、伝記、物語、等にわかれてくる。そこで、これまでの日本における *The History of King Richard III* 研究の歴史を振り返り、どのような訳語が与えられているかを整理してみることにしたい。

「續いて一五一三年にはモアの、國王リチャード第三世の傳記が公にされて居る。此れは又イギリスに於ける最初の傳記らしい傳記で、イギリス散文の時代を劃するものである。・・・」³⁾ これは戸川秋骨 (1870-1939) によるモアの評伝の中の一節である。早い時期に「ユートピア」以外のモアの主要な作品に言及している点で、注目に値するものである。

1959年刊行の澤田昭夫『トーマス・モア』は、はしがきの中で *Richard III* に次のようにふれている。『「ユートピア」はふつうロビンソンによる極めて不正確な英語によって世に親しまれているが、これは最早モアの作品の原形をとど

めたものとはいえない。モアは確かに英文学史上不朽の地位を占めている。しかし彼はその地位を『リチャード三世』、『慰めの対話』をはじめ、数多くの英文著述に負っているのである。⁴⁾ここでは『リチャード三世』という略称が用いられているが、澤田昭夫「日本におけるトマス・モア研究(-)」では『ウトピア』と関連深い『リチャード三世伝』についての研究はいまだ皆無であり、・・・となっている。但しその後の澤田著作では『リチャード三世王史』が主に用いられている。⁵⁾

その翌年に現れる『ピコ伝』、『リチャード三世』を取り上げている論文、渡辺和一郎「初期作品にみるトマス・モアの社会思想」では、「リチャード三世」はモアの同時代史であるという考えに基づいて、「リチャード三世の歴史」という訳語が使われている。⁶⁾

モアの *Richard III* は、シェイクスピアの史劇「リチャード三世」に深く影響している。ここで、シェイクスピアの「リチャード三世」の翻訳書のいくつかの中、モアの *Richard III* に言及し、‘history’ に訳語を与えているものについてふれてみよう。福原麟太郎、大山俊一訳、シェイクスピア『リチャード三世』の解題に「・・・ホリンシェッドの年代記の「リチャード三世」の部分は、サー・トマス・モアの「リチャード三世の物語」によっている。・・・」とある。⁷⁾モアのこの作品が、きわめて劇的な性質を有する文学的な叙述であることから、その内容を「物語」と受け取ることも意味のあることである。また、‘history’ と ‘story’ は共にラテン語の *historia* に由来するもので、中期英語では両者の間に意味の区別はなかった。

福田恒存は、「シェイクスピアが直接に用いた種本はホリンシェッドの『年代記』とホルの『年代記』であるが、さらに前者を通じて、トーマス・モアの『リチャード三世記』の影響を受けてみると、ウィルソンは言っている。・・・」と述べ、⁸⁾ ‘history’ を「年代記」の系譜として受け止める場合にふさわしく「記」と訳している。

次に、『研究社英米文学辞典』の *The History of Richard the Thirde* の項を見ると、「Sir Thomas More の筆になると推定される伝記で、1513年ごろ未完のまま一応書きあげられていたが、出版は1557年。More はこのほかラテン文の *Richard III* 伝も残していた (1566)。・・・」となっていて、「伝記」とし

ての見方がとられているのがうかがえる。⁹⁾

「文学辞典」に続いて、「イギリス文学史」に取り上げられている例を拾ってみるなら、『ケンブリッジ版イギリス文学史』第1巻、第3章「ルネッサンスと宗教改革」（高橋康也訳）では、「モアの文学的名声を支えているのはリチャード三世の伝記および『ユートピア』として広く知られる書物である。」（第1節「イギリス人と古典復活」とあり、第15節「年代記作者と考古家」では、「しかしここに単なる年代記作家というよりは学者であり歴史家であった三人の作家がいる。サー・トマス・モア、・・・である。『リチャード三世の歴史』（はじめハーディングの『年代記』〈1543〉に収録）をモアの作とする推定は正しいであろう。」とある。初めの引用では書名として扱っているわけではないが、この作品の文学的特質を「伝記」としてとらえている。しかし歴史家モアの作品として述べている後の引用では書名として『リチャード三世の歴史』という訳語を用いている。¹⁰⁾

『イギリス文学史序説——社会と文学——』では、『リチャード三世伝』という見出しで「トマス・モアがイギリスのみならず世界の文学史に名をとどめたのは、彼のユニークな作品 *Utopia* (1515-16) に由るのだが、イギリス文学史の中ではそのほかにも注意すべき作品を残している。その一つは『ユートピア』と前後して書かれたと推定される『リチャード三世伝』である。・・・」（執筆者、斎藤美洲）となっている。¹¹⁾ これは、同じ著者が1966年に『英国近代精神の胎動』の中で「リチャード三世伝」について論じているものに基づいている。¹²⁾

1969年の植村雅彦『チューダー・ヒューマニズム研究序説』には注の中で一箇所「リチャード三世史」によれば・・・とあり、¹³⁾ 1970年の伊達功『近代社会思想の源流』では「リチャード三世伝」が二箇所用いられている。¹⁴⁾ 1971年のE. E. レノルズ、澤田昭夫訳注『モア』は、「初期の作品」、「モアと英語散文」の章で *Richard III* にふれているが、書名の訳語としては「リチャード三世伝」「リチャード三世王史」「リチャード三世」が用いられている。¹⁵⁾

1977年はモア生誕500年にあたり、1978年には三冊のモア研究書が出版された。塚田富治『トマス・モアの政治思想』には『エピグラム』および『リチャード三世王史』を扱った章がある。¹⁶⁾ 田村秀夫責任編集の『トマス・モア研究』は第一、三、四、六章に *Richard III* への言及があり、それぞれの著者により、

また同一著者の場合でも、異なる訳語が与えられている。¹⁷⁾ この作品がどのようなカテゴリーに入るかについての興味ある考察が以下の引用に見られよう。「・・・モアの全著作の中で「文学的作品と呼べるものは、『警句集』、『リチャード三世王史』、それに『ユートピア』である。・・・『リチャード三世伝』は、未完の作品ではあるが、その文学形式は「劇的物語」というべきものである。・・・」¹⁸⁾ 『リチャード三世王史』は王位篡奪に関する研究である。政治的主題を扱ってはいるが、むろん政治論文の類ではない。歴史上の人物を扱ってはいるが、むろん厳密な意味での歴史学的著作ではない。『リチャード三世伝』という題名にもかかわらず、それは「伝記」ですらない。むろん、中世の「年代記」のようなものでは、決してない。主人公の興味ある性格描写を含んではいるが、心理学的研究といった性質のものではない。それらの要素を全部含んではいるが、そのいずれでもないのである。その本質は「劇的性格をもつ物語」すなわち「劇的物語」である。・・・」¹⁹⁾

澤田昭夫、田村秀夫、P.ミルワード編『トマス・モアとその時代』においては、渡辺淑子「『リチャード三世伝』について」の他も、すべて『リチャード三世伝』と統一されている。これは出版上の事情によるもので、必ずしも各著者の意向を反映しているとは言いがたいであろう。²⁰⁾

R. W. チェンバーズの『トマス・モアの生涯』（門間都喜郎訳）は、第二幕第五章、「モアの『リチャード三世』」の中で、『リチャード三世』『リチャード三世の歴史』となっており、²¹⁾ H. H. オシノフスキーの『トマス・モア』（小山内道子訳）、²²⁾ および『シェイクスピア全集 リチャード三世』（小田島雄志訳）の解説（高村忠明）²³⁾ では『リチャード三世伝』である。

モア自身によって英語とラテン語の両方で書かれたこの作品の日本語訳は、現在、藤原博訳『リチャード三世伝』（1986年11月刊）²⁴⁾と渡辺淑子訳『リチャード三世史』（1987年1月刊）²⁵⁾がある。いずれも英語版からの翻訳である。

モアは『リチャード三世史』の中で、‘history’という語を次のように用いている。「・・・旧約聖書や古い歴史から例をとり・・・」（certain ensamples taken out of the olde testament & other auncient histories）、²⁶⁾ また「今後、記憶に名高い高潔な君主、故ヘンリー七世王の時代か、あるいは多分、パーキン伝そのものを簡潔に書く場合、・・・」（yf we hereafter happen to write the time

of the late noble prince of famous memory king y^e seuenth, or parcase that history of Perkin in any compendious processe by it selfe.)²⁷⁾である。拙訳では一方を「歴史」、もう一方を「伝」とした。これは‘history’に含まれるさまざまな意味を訳し分ける場合の、ほんの一例でしかない。モアの *The History of King Richard III* の‘history’は、その内容が必ずしも単純ではなく、さまざまな解釈が生ずるところから、上に見たように不統一なままに現在にいたっている。筆者自身、翻訳に際して「伝」から「史」へと変更したことについては、本稿の初めにもふれたが、それは単に‘life’と‘history’の訳語を区別するためだけではなく、解釈上わずかながら考えが変わってきているためでもある。ルネッサンス・ヒューマニスト、モアの文学的にもすぐれたこの歴史叙述の研究は、翻訳し終えた段階から新たに始まったと言える。

注

- 1) 拙稿「モア『リチャード三世伝』について」、『トマス・モア研究』第4号、1973年、pp. 21-26。
 拙稿『リチャード三世伝』について、澤田昭夫、田村秀夫、P.ミルワード編『トマス・モアとその時代』 研究社、1978年、(pp. 134-52)。
 拙稿「トマス・モア『リチャード三世伝』についての一試論——対話としての読みかた——」、『県立新潟女子短期大学研究紀要』第19号、1981年。
- 2) 拙訳「トマス・モア『リチャード三世史』」、澤田昭夫監修『ユートピアと権力と死』荒竹出版社、1987年1月、(pp. 97-185)。
- 3) Sir Thomas More: *Utopia* 戸川秋骨注釈、厨川文夫改訂、研究社 1940年、Introduction, p. xv. (Ralph Robynson 訳の初版<1551>をテキストに注釈を施したもの、Introduction (pp. i -ix) はモアの評伝)
- 4) 澤田昭夫『トマス・モア』有斐閣、1959年、p. 1。
- 5) 澤田昭夫「日本におけるトマス・モア研究(-)」NANZAN REVIEW 6 1970年、p. 49。澤田昭夫訳『ユートピア』(世界の名著17 中央公論社 1969年)p. 453の註(8)の中では『リチャード三世王史』となっている。
- 6) 渡辺和一郎「初期作品にみるトマス・モアの社会思想」『三田学会雑誌』第53巻第6号、1960年、p. 23-36。(三 リチャード三世の歴史 pp. 31-35)
- 7) 福原麟太郎・大山俊一訳、シェイクスピア『リチャード三世』(角川文庫)角川書店、1956年、解題 p. 229。
 『シェイクスピア III』(世界古典文学全集 第43巻、訳者代表 大山俊一、筑摩書房、1966年)の解説(大山俊一 pp. 413-420)も同様、次の通りである。

『ヘンリー六世』の場合同様、シェイクスピアの原典はホリンスヘッドの『年代記』、ホールの『年代記』である。ホリンスヘッドの『年代記』のリチャード三世の部分は、サー・トマス・モアの『リチャード三世物語』によっている。・・・」(p. 416)

- 8) 福田恒存訳、シェイクスピア『リチャード三世』 シェイクスピア全集 I 新潮社、1960年、解題 p.200。
- 9) 斎藤勇編『研究社英米文学辞典』研究社、1961年、p. 903。(第三版1985年も同じ)
- 10) ジョージ・サン普森著、平井正穂監訳『ケンブリッジ版イギリス文学史』第1巻、研究社、1976年、p. 179、p. 237。(第3章 ルネッサンスと宗教改革、高橋康也訳)
- 11) 斎藤美洲編著『イギリス文学史序説—社会と文学—』中教出版、1978年、pp. 96。
- 12) 斎藤美洲著『英国近代精神の胎動』研究社、1966年。(V 典型的人物トマス・モア、3 「リチャード三世伝」 pp. 171-179)
- 13) 植村雅彦著『テューダー・ヒューマニズム研究序説』創文社、1969年、p. 161。
- 14) 伊達功著『近代社会思想の源流』ミネルヴァ書房、1970年、p. 61、p. 97。
- 15) E. E.レノルズ著、澤田昭夫訳注『モア』研究社、1971年、p. 8、p. 11、p. 47。
- 16) 塚田富治『トマス・モアの政治思想』木鐸社、1978年。(第一部 第三章『エビグラム』および『リチャード三世王史』 pp. 63-84)
- 17) 日本イギリス哲学学会監修、田村秀夫責任編集『トマス・モア研究』(イギリス思想研究叢書1) 御茶の水書房、1978年。(索引は『リチャード三世史』、第一章 田村秀夫『リチャード三世史』『リチャード三世王史』p. 21、第三章 塚田富治『リチャード三世王史』p. 53、p. 62、第四章 菊池理夫『リチャード三世伝』『リチャード三世王史』p. 93、p. 94、p. 96、第六章 江野沢一嘉『リチャード三世王史』『リチャード三世伝』p. 180、p. 189、p. 190、p. 191、p. 192)
- 18) 前掲 p. 180。
- 19) 前掲 p. 189。
- 20) 澤田昭夫、田村秀夫、P. ミルワード編『トマス・モアとその時代』研究社、1978年。(渡辺淑子『「リチャード三世伝」について』注1) 参照、他に言及されている箇所は、澤田昭夫 p. 17、塚田富治 p. 181、pp. 184-186、p. 188、G. マルハドール、山本浩訳 p. 233、安東伸介 p. 287、藤原博 p. 290)
- 21) R. W. チェンバーズ著 門間都喜郎訳『トマス・モアの生涯』大和書房、1982年。(第二幕第五章 モアの『リチャード三世』 pp. 97-98)。
- 22) H. H. オシノフスキー著 小山内道子訳『トマス・モア』御茶の水書房、1981年。(二 ヒューマニスト、作家としてのモア—「エビグラム」、「リチャード三世伝」、「ユートピア」—pp. 39-98)
- 23) 小田島雄志訳『リチャード三世』(シェイクスピア全集4) 白水社<白水社 U ブックス>、1983年。解説 高村忠明 pp. 247-261。
- 24) 藤原博訳、トマス・モア『リチャード三世伝』千城 1986年。
- 25) 渡辺淑子訳『リチャード三世史』注2) を参照。

- 26) *The History of King Richard III, The Complete Works of St. Thomas More*, vol. 2, ed. by Richard S. Sylvester, Yale University Press, 1963, p. 67.
渡辺淑子訳『リチャード三世史』p. 159。
- 27) *ibid.* p. 83. 前掲 p. 174。

付記 去る1986年10月3日、4日、松山商科大学で開催された第17回日本トマス・モア協会総会においての会員諸氏の貴重なご助言のおかげで、本稿を作成することができたことを感謝します。